地獄の中の人（仮）

なんかもう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地獄の中の人（仮）

【Ｎコード】
Ｎ３７２４Ｉ

【作者名】
なんかもう

【あらすじ】
私は悪魔のような猫に願い事をした。
それをかなえるためには、私も何かしなくてはいけないらしい。
なんかめんどくさいなあ。

1

1.

目の前を無彩色で彩られた女性たちが歩いてゆく。がやがやとうるさい街並み。現実世界の渋谷のようだ。私はその街の中を歩いていた。人の多い場所はあまり好きではないので足取りはこころもち早足になる。

きょろきょろしながら歩いていると、しばらくして目的の人物を見つけることができた。赤いダウンのベストを着た２０代ほどの男性。彼こそがこの夢の持ち主だ。後ろから肩を叩く。

彼が振り返る。あ、やっぱり。久しぶりだね。私だよ、私。なんて。二言三言、適当な言葉を交わして、私は彼の手を握った。こういうのは勢いが大事なのだと最近学んだ。結局目覚めた時には忘れているのだ。旅の恥はかき捨てと言うではないか。

にこりと笑う私と違和感に怪訝な顔をする彼。だけど、今更、もうちょっと遅い。

この程度なら、このままいけそうだ。

彼をつかむ手に力を込めた。彼を中心としてギュルギュルと縮んでゆく世界。建物が歪み、空と街路樹が混ざり合う。彼ははっとして私の手を振りほどいた。とたん世界の縮小が止まる。その手をつかもうと私は再び手を伸ばす。しかし届く前に彼はかけて逃げてしまった。縮むのをやめた世界は今度は混沌の螺旋をえがきながら暗く濁っていく。濃い紫色の闇の中に私と逃げていく彼の背中だけが明確に浮かび上がった。地面の感覚さえも次第に薄れていくようだ。不安定な足下に少しひるむ。しかしこの世界に限っては、地面なんてそこにあろうとなかろうと、私が歩こうとすればそこに足場はできるのだということを、私は知っていた。意外なしぶとさを見せる相手を私は急いで追いかける。男女差や、日ごろの運動量などから現実世界では決して追いつけないスピードも、夢の世界でなら追い

つける。彼が自分の夢に対してかけるエネルギーと私のそれとでは私のほうが強いからだ。普段はしない運動にハッ、ハッと強く呼吸をした。

「あーあ。油断は禁物って言ったのに。中だるみか？」足元で茶々を入れてくるやつ。それを無視して私は再度彼の腕をつかむ。腕をつかんで彼を引き倒しそのまま馬乗りになる。世界がまた縮小を始めた。青い顔をして恐怖に暴れる彼を押し籠めて、私は世界をどんどんと凝縮していく。世界はどんどんと小さくなる。輪郭が丸くなり、彼ひとりがやっと入るくらいの大きさになってもまだ縮み続ける。縮むにつれてはみだした彼の足や手の先が見えなくなる。彼の方ももう暴れる元気はなくなったようで目はかろうじて開いているもののぐったりとしている。そして体の半分も見えなくなったころ、モザイクをかけるようにゆっくりと、彼の体は薄れていった。最終的に、私のてのひらにはビー玉ほどの透明な石が残った。私は馬乗りを崩して地面に寝そべる。

「おー。おめっとさん。」やついわく、これは水晶に似ているらしい。私にはガラス玉にしか見えないのだが。石を確かめるように握って一息つく。硬質な感触。達成感に口もとをゆるめる。

「ちょっと手こずった。大した相手じゃないって言ってたのに。」

「それはお前が油断してかかったからだろう？もっとちゃんとつかんでればあんな追いかけっこなんてしなくてすんだのに。」

私の周りをクロネコが優雅に歩く。まんま図星をついてきたので何も言い返せずに黙る。

「ほら、帰るぞ。起きろ。」

彼は夢の世界の水先案内人だ。彼がいなければ、私はたくさんの夢が漂う宇宙のなかをやみくもに歩くことになる。ハッキリ言って自殺行為だ。人は自分の夢の中からでしか現実世界に帰ることができない。迷ってしまったら、思念体のこちらはいいかもしれないが、現実世界の私は昏々と眠り続け、いずれは死んでしまうことだろう。

「待ってよ。」私は歩き出したクロネコの後をあわてて追いかける。

そこから私の世界までは遠いのか、近いのか。個人の夢の中ではない夢の外側は何もかもがあやふやで、時々足もとが抜ける感覚がして心臓に悪い。やつはいずれ慣れると言っていた。一見何もない世界の中を、やつはときどき何かをよけるように蛇行して歩く。きっとそこに誰かの夢の入り口があるのだろう。人間の私には見えない。扉のような形だったり、ただの裂け目だったり、ブラックホールのような穴があいていたりするものらしい。もし間違って入ってしまったら大変なので注意をしなければいけない。

足が何か柔らかいものを踏んだ。次いで粘着質な液体に包み込まれるような感触。両足と、体を全部入れ終えて、ふと腕を見たらびっしりと鳥肌が立っていた。うわ、気持ち悪い。

その部屋は廃墟のようだ。いたるところが壊れ、壁紙がはがれ、カーテンはもれなくビリビリになっている。その中央にはテーブルと椅子が3脚。一つの椅子の上には若い少年がのっていて、胸ををナイフで突かれ、ぐったりとしている。暗い闇の中で細かくは見えないがきっと死んでいるのだろう。これが私の夢の世界だ。この少年が死ぬことが、私の夢。

そしてテーブル。木でできていて脚は真ん中に一つだけ。どこかの洋館にでもありそうな造形。少し背が高い。テーブルクロスも何もしかれていない質素な机の上に丸い金魚鉢のような入れもの。金魚鉢の、上のひらひらを切り取ったような形だ。中空の球体の上を少しだけ切り取った形、と言ってもいいかもしれない。透明でつるつるしている。中には透明な液体がほんの少しだけ溜まっている。私は微笑みながら、先ほどとってきた彼の夢をその中に落とした。球体がコロン、という音を立てて容器の底につき、氷が解けるのを早回しにするように、3秒ほどで液体に溶けて混ざった。液体のかさが少し増す。それを見て微笑んだ。ああ、うれしい。

「よくそんなんで喜べるな、お前。まだこんなしか溜まってないぞ。」クロネコがこんな、と言って容器の下の方を舐めた。その体制のままこちらを見て憎たらしく笑う。

「まあ、それは始まったばかりだからしょうがないでしょ。…でも、この調子で。どんどん溜めて、この容器が夢で満杯になったら、そのとき」
「お前の夢は叶う。」
私はにじみでる笑みのそのままに、容器に頬ずりをした。
頭の奥でゴーン、ゴーンと鐘が鳴る。そろそろ目覚める時間だ。

2.

それは突然の出来事だった。夜中に突然電話が鳴った。時計を見るときっかり12時。それだけはよく覚えている。
私や彼の周りの人にとってだけ、突然の出来事だった。
きっとそのほかの人にとっては何の変哲もない夜のこと。幸せに包まれて眠りについた人がほとんどだろう。この世界の、いや、日本の中に限定したって、これはそう珍しいことではないのだ。今この瞬間にだって生まれる人は生まれているし死ぬ人は死んでいるだろう。同じ時に、幸せの絶頂にいる人と何もかも無くして路上で途方に暮れている人も、何でもいる。それから比べたら全然、全然、他の人にとっては関係のない、突然のことなんかでは…、

――回りくどいことをいっても仕方がない。父が死んだ。

そんなに突出していい父親ではなかったが、早くに母を亡くした私を男手ひとつで育ててくれた。
恩は感じていた。普段はそんなこと、言ったことはないが。
交通事故だったらしい。ある少年が載っていたバイクと細い路地の曲がり角でぶつかった。
当りどころも悪かったのだそうだ。
父は死んだ。
通夜や葬式は親戚のおじさんおばさんが手伝ってくれたので何とか

こなすことができた。学校にもその間は行っていられなかった。忙しかったのと、なんだかいく気がしなかったのと。友達も父が死んだことは知っていたので、無理してまでこなくていいよ、と言ってくれていた。
まだ父が死んだことを実感できない。半月が過ぎた。
見慣れた母の写真の隣に見慣れない父の写真。仏壇はないので適当な棚に置いて、時々線香をあげている。
なぜ父は死んでしまったのだろう。
私一人だけのがらんどうとした部屋。二人でいたときも部屋が余っていたくらいなのに、一人で暮らすとなるとこれは私の手には余る。ここを引き払って手伝ってくれていた叔父夫婦のところに引き取ってもらおうか、という話もあったが、私ももう二十歳になるのでまだ考え中、と言ってある。本当に申し訳ないことだ。他にもいろいろと考えなければいけないことはある。しかし
なぜ父は死んでしまったのだろう。
警察に聞いた事故当時の状況を頭の中でシュミレーションする。
くらい真夜中に、細い路地で。外灯もほとんどついていない。飲み会の帰りに酔っぱらいながら、紺色のスーツを着て歩く父。少しスピードを出したまま曲がり角に入るバイクと運転する若い少年。頭の中でバイクのギュルギュルギュル、というエンジン音が大きく響く。――あっ！
ドンっという音とともに父が跳ね飛ばされた。
思わず目を開く。その後のことは想像していられない。
同時に一度だけ会ったその若い少年の顔を思い出す。青い顔をして私に謝っていた。
悪い人ではないのだろう、とは思う、が。

頭の中で何度もその若い少年を殺す。曲がり角で父とぶつかるその前に。父の死んでいた病院で怒りにまかせて。はたまたただ突っ立っている彼の腹を突きさして。切り刻んだ。想像上の彼はまぬけな

顔をしていた。

頭のどこかでこのままではいけないという思いはあった。父が死んでひと月近くたとうとしているがまだ立ち直れない。友達もそろそろせかしてきた。今期の単位は危ないかもしれない。

頭の中で少年を殺す。少年を殺す。少年の存在をすべて消し去りたいと願う。彼がいなかったら父が死ぬ事なんてなかったのに。

ソファーに寝っ転がりながらもぞりと身動きをする。頭の奥のどこかで、鐘が鳴った気がした。

3.

「あーーーー、終わったーーー」

3時間以上学校のパソコンの前にかかりっきりで、やっとレポートを仕上げた。途中ずっと休んでいたこともあって話がもうついていけない。友達に助けてもらわなかったらきっと落としていただろう。もうこの先生やだーーー。

「でも内容はユーコ好きでしょ？」

「でーもさー」

「っていうかまたクマひどいよ。ちゃんと寝てる？」

「んー、いや寝てるけどさ。昨日からもうわけわかんなくて。これはもう里ちゃんに頼むしかないって思ったんだ。ほんと助かったよ。」

「ならいいけど。」

父が死んでふた月ほど。ひと月を超えたあたりから学校に来出した私を、まだ友達はときどき心配そうな顔で見る。

「まあでも。今日はもう帰って寝ようかな。」

「そーしなよ。」

「うん。じゃね。」

「バイバーイ。」

里ちゃんはまだ学校に用事があるらしい。一人家路につく。

「遅い。」昨日の夜から頭の奥でごんごんと鐘が鳴っているのは気づいていた。気づいていたがレポートの提出日は今日の１７時までだ。寝るのが遅すぎて、夢を追う気力よりも睡眠欲が勝ってしまったのだろう。不思議と夢の世界で目覚めることはなかった。
「…もう、うるさいなあ…。しょうがないじゃない。レポートあったんだから。」
「お前は夢を集めるよりもレポートのほうが大事なのか。」
「そういうわけじゃないけどさぁ。あの先生とりあえずレポート出さないと単位くれないんだもん。」
「ふんっ」黒猫は尻尾をぴんと立て、尻をふりふり歩く。「最近の奴はよくわからん。」なんだか不機嫌そうだ。いや、ここの何日かはずっとこんな感じか…。
私も彼の後ろについて歩き出した。
「今日の相手はどんな人？」
「２０代後半、男。」
「…なんかそんな感じの人多いね。」
クロネコが眉根をよせて私を振り返る。
「バカか。」開口一番。思わずむっとする。黒猫はまた正面を向いて歩き出した。
「お前はまだ力が弱い。下手なやつにぶつけたらお前がつぶされて終わりだ。」つぶされて、というのは他の人の夢に圧倒されたりして自分の夢を追う気がなくなったりすることを指すのだそうだ。実はそこのところ、私はまだよくわかっていない。ただ、つぶされてしまうのはだめらしい。
「ガキの夢は無邪気すぎて引きずられる。あんまり歳くったやつらの夢は執着質。人にもよるけどな。お前の相手はせいぜい１０代から３０代までだ。」
「ふーん」

「いいか、俺らは慈善事業やってんじゃないんだ。お前たちは上の奴らの娯楽に供するために選ばれたにすぎない。俺にとっても仕事だ。ノルマもある。せいぜい苦労もしつつピンチも入れつつ、かつお前を負けさせずに夢をかなえてやらなきゃいけない。面倒なことこの上ない。」
やっぱり不機嫌だ。
立ち止まる。
「着いたぞ。」
「うん。」
クロネコが先に中に入る。私も続く。
「さっさと仕留めちまえ。」
標的は目の前にいた。聞いていたよりも少し年のいった男と、きれいめの女性、子供が二人。しあわせ家族計画というやつだろうか。
びっくりした顔でこちらを見ている。
私はリビングのど真ん中に現れた不審者だ。旦那さん、おそらくこの夢の持ち主、が代表して私に話しかける。
「君は…誰だ？」
「…」
クロネコを見るとめんどくさそうに顎をしゃくられた。まあ、問題も見当たらなかったので、
私は彼の腕を力いっぱいつかんだ。
「なっ！！」
もともとリビングしか見えていなかった夢の世界。夢はあっという間に消え失せた。手の中にはいつものようなガラス玉。しかし心なしか軽い気がする。
終わったのを見てやつはさっさと歩き始める。帰るのだろう。私はそれを追いかける。
「ちょっと、これ…。」
「なんだ」歩みは止めない。
「いや、だってこれ…。」

「うるさいな。もうこの近辺のはあらかたとりつくしてんだよ。その上目えつけてた最後の一個は昨日あいつらに持ってかれた」
「あいつら…、って、いや、誰？」
「お前みたいのがほかにもいるんだ。俺みたいのもな。いわゆる同僚ってやつ。前は比較的夢も多かったからこんなことはなかったんだが…最近は量も質も悪くなってな。他の奴がやってるところでも平気でとっていきやがる。まあ、今の状況で手っとり早くかなえようと思ったら量集めなきゃならねえしな。」
ってことは、「ライバル…？」
「にもなんねえよ。あっちの方が強い。…いや、今は同じくらいだろうけどな。あいつら、特例コンビだから。」
意味はよく分からないが、状況は悪いらしい。
「ちょっと、それ、大変なんじゃないの？」
「大変、…だがまあそこまでもない。ユーコが頑張って遠出すればいいだけだ。」クロネコはお前のせいだと言わんばかりに、牙を出していーっ、という表情をする。最近機嫌の悪い原因はこれだったのか、とようやく思い当たる。
「まったく、俺の負担も考えろと言うんだ。お前はボケっと後ろ歩いてるだけだから疲れるだけかもわからんが俺はちゃんと道のりも考えて歩かなきゃいけないんだぞ。しかもちゃんとお前が捕まえられる範囲の夢に連れて行ってやらなきゃならない。」
遠くにちゃんと夢があるならそこまで連れてってくれればよかったのに。
やつが鼻を鳴らす。「今日はもう時間がない。お前、レポートで疲れすぎだろ。そんな状態でやっても大した成果は出ない。――現実ではあんまり疲れてくるなよ。」
無茶を言う。そんな毎日でもない夢集めのために昼間を犠牲にはできないのに。それならちゃんといついつ行くから準備しとけとかそんなさあ…。
「おい、ぐちぐちうるさいぞ。」

「って頭の中読まないでよ。っと、」いつの間にか私の夢についていたらしい。いつものぐにゃりとした感覚。やつは普通に歩いて行くからそれがあるまで気づけない。
「お前が勝手に垂れ流してるだけだ。聞こうと思って聞いてるんじゃない。」
「そろそろ寝ないと寝坊するぞ。」頭の奥で荘厳な鐘の音が響く。意識が急速に薄れていった。
手からガラス玉がコロンと落ちる。あっ、と思って見ていると、クロネコがそれをくわえて容器に落とした。そこで途切れる。
それにしても夢の中からまた「寝る」だなんて。ちょっと可笑しい。

1（後書き）

習作です。
コメント、アドバイスお気軽にどうぞ。

2

4.

頭の奥で鐘が鳴る。
久しぶりの招集だ。
「やあ…一週間ぶり？」
この中で起きるときは大体テーブルに突っ伏して寝ていることが多い。座ったままの姿勢だから、少し肩が痛いのだ。まあ文句を言ってもここにはベッドも布団もないし横になって寝るとしたら地べたしかないからこれしか選択肢はないのだけど。
たまに椅子を二つ使って上半身だけ横になっていたりするが、椅子は木だけでクッションも何もついてないので固いことこの上ない。
「一週間と、何日か、だな。」
はじめのころに比べると頻度は少なくなった。重量のある夢があまり見当たらないのだという。あまり手ごたえがないのも困るが、こう日があいては…。
最近はよく頭の中で少年を殺すようになった。以前よりも確実に多い。私の夢の力が強くなっている証拠だろう。よいことだ。けれど早く夢をかなえたい、少年を殺したいという思いもまた強くなった。こうのんびりしていると、焦る。
気持ちを切り替えるために一つあくびをする。
「それじゃあ、行きますか。」
近くにいい物件がないものだから最近は遠出することが多い。この中にいる間はあまり感じないのだが、現実世界で起きた時に全く疲れが取れていないのでやっぱり遠いのかな、と思う。私が寝ているとき、周りから見て、だが、は二種類の眠りがあって、こうして体は寝ていても頭の中で動き回っている時と、体も頭も寝ている、普通の休息の眠りと、二つだ。夢を集めている間の眠りは、夢の中でアグレッシブに動き回っていることも多いので全く疲れはとれない。

むしろ疲れる。休息の眠りは普通に寝れる。夢を集めている時間は寝ているものと考えずに徹夜しているものと考えるのが妥当だ。私の中で。周りから見れば授業中にも寝てるし夜も早く帰って寝ちゃうし、なんであんなに疲れてるんだろう、という話だけれど…。そう毎日のことではないのが救いだ。

「今日はいいのがあるんだ。」クロネコが弾んだ声で切り出す。

「こいつは近場にある上に結構力も強い。」

クロネコがテーブルからぴょん、と下りて歩き出した。

「最近できたやつなんだけどな、出たり消えたりして安定しなかったんだが…、最近やっと、毎日出てくるようになった。できたての割には力が強くてな。まだエリカも気づいてないんじゃないか？」

エリカというのは例の特例コンビとやらの、夢をかなえてもらう方らしい。私はよく知らないが、クロネコはよく知っているような口ぶりだ。「まあ、でも…」

立ち止った。…これは本当に近かった気がする。

「気づいていたとしても保留扱いなのかもな…。

いいか、今回の相手はちょっと、…どころじゃなく手ごわい。エリカでも、たぶんかなわないだろう。っつったらお前の力では到底かなわない。だが」

そこで一つ区切ってこちらに向き直った。まるで試合前の選手を鼓舞するコーチのようだ。

「お前が不意を衝いて勝負を決めちまえば何とかなる範囲だ。喜べ、今回の相手は知り合いだぞ。」

「…知り合い？」

「そう。夢の中にあまり話したことのない知り合いが出てくることって、よくあるだろう？だから不信に思われない。なぜ、と思っても、夢の中だから許される。向こうもまさか自分の夢をとりに来ているだなんて思わない。捕まえて全速力で事を済ませちまえば、まあ、大丈夫だろう。」

「…へえ。」知り合いの夢の中に入るのは初めてだ。

深呼吸をする。「……よし。」
クロネコが不敵に微笑んで、夢の中へ消えてゆく。私もそれを追う。
夢の中に入る独特の、ぐにゃりという感触がした。

ひろい空間だった。正面のずっと向こうに壁がある。天井は見えない。左右や後ろを見ても壁は見えない。
目に飛び込んでくるのは白と極彩色。壁の白に多数の原色がにじむ。色がにじみ合って色を作る。澄んだ色彩。一点の曇りもない光のよう。
光の足もとにうずくまって何かを書いている少女がいた。少女の周りに色彩がにじむ。彼女がきっとこの夢の持ち主だ。
誰だろう。
私は彼女に近づく。近づいてみると色づいた壁は思ったよりも大きくて圧倒される。
私のほう、というため息に反応して少女が振り返る。
ああ、この顔は。
「里ちゃん。」
「ユーコ？」里ちゃんもびっくりしているようだ。
「どうしたの？これ。すごいね。」
「すごい？」
「すごい、きれい。」それは正直な感想だった。里ちゃんが心の中でこんな夢を温めていたなんて。
「そう、かな。」
「うん」里ちゃんが恥ずかしげにうつむいた。いつもより幼い少女の、あどけない顔つきが愛らしい。
「でも、私なんて全然。一度はあきらめた夢なんだけど、先輩が、励ましてくれたから。」里ちゃんが可愛い顔で微笑む。
「へえ、そうなんだ。」私もなんだか和んだ。
クロネコがこちらを見ている。
この白い空間に黒い体はとても目立って映えた。

「私はもっと、きれいな絵を描けるようになりたい。」
里ちゃんが壁を眺めて呟いた。
「こんなのじゃダメ。もっと、もっと美しい絵を。」
その背中は夢に満ち溢れていた。
…私とは大違いだ。
「おい」
つい考えてしまう。この夢を奪ってまで私の夢は本当に…
「おい！」

里ちゃんは再びうずくまって何かを描き始めた。
「お前、何考えてる？」
私は足元を見た。
「夢に引きずられてんじゃねえよ。お前にはお前の夢があってそれをかなえるためにはこいつが必要だ。　わかるだろう？」
「でも…これは」
「お前、自分の夢と、こいつの夢と、どっちが大切だ？」
「そんなの…」
唇をかんだ。
「選べよ。どっちだ？」
何かを無心に描く彼女の背中。それを照らす白と三原色。
薄汚れた私と真っ黒なクロネコ。

以前、
クロネコにあって間もない頃聞いた覚えがある。
「夢をとられた人はどうなってしまうの？」
やつは答えた。
「無気力になるんだよ。」

夢ってのは、ある種の情熱だ。
それをとられてしまうということはその何かに対しての情熱を失っ

てしまうということ。
だから夢が強ければ強いほど傾けている情熱の量も大きく、それを失った時の反動はでかい。まあその分俺らもリスクをしょってその夢をいただくんだけどな。
「リスク？」
そのうち、わかるよ。

「そんなの…」
私に決まってる。

私は何気ないスキンシップを装って彼女の肩に手をかけた。

5.

その帰り道でのことだ。私は心なしか重量感のあるガラス玉を手に帰路についていた。
いつものように歩いているとクロネコがくん、と顎を上げて止まった。
「どうしたの？」
いくら近いとはいえ、まだ夢からは出たばかりだ。
クロネコは私を無視して耳をそばだてている。
「急ぐぞ。」
そう言って駆けだした。
と思ったらどこからか出てきた男の人に抱きあげられた。ギャッ！
と猫のように声を荒げる。
「あら、随分とごあいさつじゃない？」
「え？」
横手から現れた女性。こちらを見てにこりと笑った。
「こんばんは」
「…こんばんは」
クロネコを抱く男性は、少なくとも日本人じゃない。欧米の人だろ

うか。ブロンドの髪に灰色がかった瞳。背は高いが痩せて、おっとりとしている。
「何の用だ。」クロネコが吠える。尻尾がぷらぷらと揺れている。
「何、って。知り合いが近くにいたら挨拶くらいするのが普通でしょう？」女性が答えた。
「ここではそんなことしなくていいんだ。」
展開についていけなくて困る。
「ユーコは疲れている。さっさと帰らせろ。」
「あら、あなた」女性の眼がこちらを向く。一瞬目を細めて鋭く光る。
「ユーコちゃん、っていうのね。…いいもの持ってるじゃない。」
ガラス玉を持つ私の右手を凝視する。
私は手を後ろに隠してじりっ、と後ずさる。私の体も手も透かしてガラス玉を見ているような茫洋とした瞳が怖い。
「こら」
いつの間にか男性から逃げ出したクロネコが私と彼女の間に立った。
「ちょっと、離しちゃダメじゃない。」彼女が後ろの男性に抗議している。
クロネコが私を目で促す。
逃げろ、ということだろうか。
「逃げちゃダメよ。」
クロネコが片眉をあげる。「挨拶ならもう済んだろ。」
「…元パートナーに対してひどいじゃない。あのときは…あんなにやさしくしてくれたのに。」
「誤解を招くようなことを言うな。…ったく。」
クロネコは踵を返して尻尾を一振りする。「帰るぞ」
彼女が謎めいた瞳を向けていた。

6.

「あの人は？」

私の夢に着いて一番に言った。
「エリカだ。」
エリカ…あの！
「例の特例コンビって人たち？」
「そう」
「でもどうしてあの人たちがこんなところに」
「知るか。」
「ねえ…」「うるさいな。」頭の中で鐘がゴィンゴィンと鳴っている。いつもよりも耳の近くで鳴っていてうるさい。反響で耳鳴りがする。「子供はもう寝る時間だ。」鐘はまだゴインゴインと鳴っている。「ちょっ、と…」
私は最後の力を振り絞って容器にガラス玉を入れた。意識が途切れた。

寝苦しくて目が覚める。
時間は午前４時１５分。クロネコへの怒りがふつふつとこみあげる。
「あンの猫もどきめ…。」
完全に目が覚めてしまった。頭は疲れているというのに。ほんと、次あったらどうしてくれよう。
この後起きだして学校へ行く気も起きない。もういい！さぼりだ！
さぼり！ゲーム三昧で憂さを晴らしてやる。

7.
次の日はちゃんと行った。そもそも、私は比較的真面目に授業に出るほうなのだ。さぼりのほうが珍しい。
教室に行くと里ちゃんの隣が空いていたのでそこに座ることにした。
挨拶をして席に着く。
「あー…眠い。1限ってめんどくさいよね。」
「ねー…。朝早いし。眠いし。やんなっちゃう。」
「ああ、そう言えばさ、里ちゃん昨日のマクロ経済学とってるっけ。

」
「うん？とってるけど…ああ、昨日いなかったっけ。」
「そうー。まあさぼりなんだけど。」
「ちゃんと来いよーー。」
「何かめちゃくちゃ夢見悪くってさあ。勉強する気がしなかったんだよ。」
「夢ぇ？どんなの見たの？」
「いや…もうあんま覚えてないんだけど、後味がすごく悪くってさぁ。何かむかむかするっていうか…。」
とっさにうそをつく。さすがに本当のことは言えない。
「へえ…。」
里ちゃんはいたっていつも通りだった。そう言いえば一昨日に夢をとったのは里ちゃんだったんだけど…。後遺症とかはないんだろうか。
「そういえば一昨日私も夢見たんだけど、ユーコ出てきたよ。」
「え？マジで？なんか言ってた？」どきりとする。
「んー…。私も覚えてないや。でも…悪い夢ではなかったと思うよ。」里ちゃんの眼が一瞬遠くを見る。
「そっかぁ…。ならよかった。」
「あ、先生来た。」
会話はそこで途切れた。里ちゃんはどこかぼうっとしている。

8.
「あれ？」
夢の中で目が覚めた。
といってもいつものように呼び出されたわけではない。鐘も鳴ってはいない。
こんなことは初めてだ。やることもないので改めて部屋を検分する。分かっていはいたが陰鬱な部屋。いやな夢だ。
「ん？」部屋の隅の台に布をかけられた何かがある。

布を外すと飲みかけのワインとグラスがあった。
「なにこれ。」
私はワインなんて飲まない。それとも心の奥底では飲んでみたいと望んていたりするのだろうか。
グラスは典型的なワイングラス。足が長くて受け口は丸い。ふわんとしている。
ワインは三分の二ほど残っていた。
「あ。」
茶髪の男性がこちらを見ていた。今夢の中に入ってきた人のようだ。見知らぬ人のはずなのになぜか親近感を覚える。
「あー…ユーコ、来てたのか。」
ほりの深めな顔立ち。ヨーロッパあたりにいそうな男性だ。顔には薄くそばかすがちり、髪はセンター分けで大胆に外ハネしている。…癖毛だろうか。欧米人の顔はわからないが、どことなく幼さが残っている気がする…。
「あー、そうか、もう、そんなか。」男は驚いた顔のまま一人思案している。
「…その声…。」
最近よく聞く声だ。
「俺だ、俺。」
男性の体が歪み、いつもの黒猫の姿になった。
「別にさっきのままでもよかったのに。」
「俺はオンとオフは分ける方なんだよ。」
「オフ、ってさっきの？」
「…まあな。」
「じゃあ、さっきのほうが楽なんだ。なんでそんなカッコしてるの？」
「…なんとなく？」
「…これ、あなたの？　ワイン。」
「ああ。」

よかった。私にワイン飲みたい願望はないみたい。
「ねえ、今日、呼んだ？」
「いや。お前が勝手にきたんだ。」
「そんなこともできるんだ？」
「まあ、これのせいだな。」
クロネコは言って夢の詰まった容器の前に立った。もう半分以上が満たされている。
「お前さ、最近これのことばかり考えてるだろ。」
どきりとする。思い当たる節ならあった。
「おかしなことじゃねえよ。このくらい溜まってくると、みんなそうなるんだ。」
「夢ってのは執着だと、言っただろう？」悪魔のささやきが聞こえる。
そうだ、こいつは地獄の住人だった。
「程度の問題だよ。少しならいい。何らかの執着がないとむしろ生きていけないし、その執着こそが生きがいだというやつもいるだろう。」けどな。
クロネコは何でもないことのように淡々と述べる。
「執着も過ぎれば毒だ。そう、狂気と言えばいいかな。狂おしいほどの執着。他の奴の執着心をわざわざ集めて回ってるんだ。それくらい、なるもんだろ。んで、その執着…夢の力が強くなると自分からここにきてどこかに夢が転がってないか一人歩きするようになる。最悪迷って死ぬ。」先に俺が来てよかったな、クロネコはそう締めくくった。
――私は、何か恐ろしいことをしているのではないだろうか？
『ねえ本当に、あなたの夢ってそこまでしてかなえなければいけないものなの？』

まぶたの裏で赤い唇がニイッと笑みを作る。
『そんな夢なら、私にちょうだいよ。そしたら、あなたなんかよりもうっと有効活用してあげるわ。』
頭の中でエリカがうそぶく。
心臓がどくどくと音をたてる。
『ねえ、そしたら、あなたはこの夢から解放されるわね？』
エリカの謎めいた瞳が私を射抜く。
『ねえ…』

「おい、大丈夫か？」
「へっ！？」
「今死にそうな顔してたぞ。」
「あ、ああ…。」
あんなの、ただの想像だ。エリカとはあれ以来会っていないしあんな言葉をぶつけられた事なんてないのに。
「驚かせちまったな。まあでもそれも夢をかなえるまでの辛抱だ。ここまでくれば強い夢を持ってるやつのところにも行けるし、そうしたらたまるのも速い。」
「ねえ、今日はどこか行く？」
「…夢ならないぞ。いきなり来て準備なんかしてるわけないだろう。」
「…そっか。」
「顔色が悪い。今日はもう寝ろ。」
頭の奥で鐘が鳴った。私を断罪するかのような音だった。

3

9.

「なに、これ」

そこはまるで廃墟の一室だった。

「何がだ？」

部屋の真ん中にあるテーブルに猫がうずくまっている。

黒猫はグイッと伸びをして自分の背中を舐めた。

「ここはお前の夢の中だ。」

「猫が、しゃべった？」思わず声が裏返る。ちょっと恥ずかしい。

「夢だからな。」

「――ああ、そっか。夢だからか。」にしてもしゃべる猫なんて魔女の使い魔みたい。

「そう。夢。――ところでお前の夢ってこいつか？」

テーブル手前の椅子に少年が座っている。ヨーロピアンなこげ茶色の椅子だ。

よく見ると胸を刺されて死んでいる。

「キャッ！！」

「…きゃっ、ってお前。自分のやったことだろう？」

「え？！そんな。私そんなことしてない…。」

「顔をよく見ろ。心当たりはないか？」

「えぇー…」気味は悪かったが妙に力強い猫の目に促されて顔を見る。

「！この人…！」

まだ少しあどけない顔つき。青い顔をして私に謝っていた、彼は。

そう。

「この人は…。」そう、確かに私が殺したのだ。

彼は驚いたように目を見開いて固まっている。ぴくりともしない。

「心当たり、あるようだな。」

なら話は早い。
黒猫がニイッと笑う。なんて表情豊かな猫なんだろう。
「これ、はまだ想像上の死体だ。お前が頭の中で殺したやつの死体だ。なあ、――」

思いもかけないことを言われた気がする。
「え、なに」
「現実のものにしてやろう。この男を、殺してやろう。」
「そんな。どうやって。」
黒猫がははっと笑った。
「これだよ。」
彼は立ち上がり、尻尾で背後の容器を撫ぜた。
ガラスのようなものでできた透明な容器があった。丸く、装飾はない。入口だけがぽっかりと空いている。
「なに」
「今も中に少し入っているだろう。」
来い、と目配せされたような気がするのでふらりと近づいていく。
直径３０センチほどの丸い容器の底に申し訳程度に数滴の水。
「お前の夢の総量だ。」
「え？」意味が分からない。
「お前の夢にかける気持ちを可視化したものだ。…まあ量が多ければ多いほどいいと思ってくれればいい。」
「え？」
「この中に夢をためる。」
「ためる？」
「そう。この世界にはお前以外にも夢を持っているやつは大勢いる。そいつらから拝借してくる。」
「それって、…そんなこと、していいの？」
「ただの夢だからな。現実世界でちょっと心変わりするくらいだ。」
「…ふうん」

「で、やるか？」
「やる、って何を？」
「この中に夢をためて、この容器を満杯にすれば褒美としてお前の夢をかなえてやる。」
「えー…？」
「なんだ、お前、信じてないな？」
なぜわかった。
「顔に書いてあるっての。」
「…」思わず顔に触れてしまう。
「言っとくけど、ほんとのことだぜ？本当に、かなえてやる。」
私はじっと黒猫を見た。
「…そう、信じられないならちょっと裏話をしてやろう。」
彼は楽しげに笑った。
「これはな、慈善事業じゃないんだよ。俺らにとってお前の夢をかなえてやるのはおまけでしかない。」
「？」
「俺は…、まあ地獄、と思ってもらえればいい。そこの世界の下っ端だ。見てもわかるだろうが人間じゃない。」
猫だしね。
「そこの上の奴らってさ、すごい暇なんだよ。毎日同じことばかりで娯楽がない。んでどこかに娯楽が転がってないか、と思ったら、ビンゴ。お前たちがいた。」
笑いがいやらしいものに変わる。本当に、表情豊かな猫だ。
「お前らの夢をかなえてやるかわりにおもちゃになってよ。ってこと。お前がこれを承諾すれば俺は上にこのことを報告して、お前はめでたくおもちゃの仲間入り、ってわけ。どこからかは知んないけどさ、上の奴らには見えるようになってんだよ。この世界のことはどこだって。」
だんだん話が見えてきた。
「お前らが夢を集めるのに四苦八苦してるのを見て、やつらは喜ぶ

わけ。」
「…夢を集めるのって、大変なの？」
「大変といえば大変だしそうじゃないといえばそうじゃない。夢の強さは人それぞれだからな。ローリスクローリターンをとるかハイリスクハイリターンをとるか、って感じ。まあそこのところは俺が調整するから。お前は行った先で夢を集めればいいだけだ。方法は追って説明する。――な、どうだ？やる気になったか？」
「そんな、おもちゃ、だなんて。」
「でもやつらは見てるだけだからさ。本当に。実害はないんだぜ？ちゃんと夢を集めてれば、絶対に夢はかなえてやるし。な？」
「危なくないの？」
「お前らが危なくないように、俺がついてるんだ。俺だって遊びじゃない。ノルマもある。こっちもお前に何かあったら困るようになってんの。だからできる限りサポートする。」
「なんか、いまいち…。」
黒猫が私を見る。
「だって、夢の中の話だし…。」
「じゃあ、とりあえず考えるだけ考えといて。今日はもう朝に近いし、返事は今度聞こう。」
遠くの方で鐘が鳴る音がする。
「でも忘れてるかも…」
「夢だからか？」
「うん…」
音が近づいてくる。
「忘れないよ。これは。」
瞼か重い。
「ちゃんと、考えておけ。悪い話ではないはずだ。」その黒猫の、口元をじっと見ていた。

１０．

ごろり、とベッドの上で寝返りを打った。
エリカ。勝気な瞳が印象的な彼女。
『ねえ…』
笑う唇。
ああ、想像上の言葉だというのに。
『私に、ちょうだい？』
一瞬あげられるものならあげたいと思ってしまった。
――でも、だめだ。
私にはかなえたい夢がある。父の仇を討つのだ。
あの少年を、殺すのだ。
『―でも本当に…―』
彼女の言葉がよみがえる。
『本当に？』

今日の私はどうかしている。もう寝よう。
寝ればきっと、朝になる。朝になれば今日の事なんて覚えていない。
毛布を顔まで引き上げた。

１１．
ベッドの上に寝そべったままゲームをしていた。午後４時。寝すぎて頭が痛い。さっさと寝て夢を集めに行きたいが目を閉じても全く眠れない。お腹が空いた。インスタントラーメンを食べる。
お腹が満たされたからだろうか。ベッドに寝ていると眠気が襲ってくる。逆らわずに目を閉じた。脳裏ではあの少年がバラバラに引きちぎられている。血が至る所に飛び散り、少年の悲鳴が辺り一面に響く。いい気味だ。
今日も夢を集める。
眠る。
集める。
眠る。

集める。
眠る。

１２。
今日の相手は7、８歳の子供だった。夢の世界を縦横無尽に駆け巡る。分別のつかない子どもだけに、この世界では厄介。思いもよらない行動を仕掛けてくる。
「ちっ！」
捕まえようとする手をするりするりとすり抜ける。
突然後方をうかがっていたクロネコが叫んだ。
「逃げろ！！」
私は何事かと後ろを振り返る。その前に
脇腹から二本の腕が生えて私を捉える。
「つーかまえた。」
「！！あなた！」
足元でクロネコが吠えている。
「おい！どういうことだ！！先に入ってたのは俺らのほうだぞ！！」
「だって…」と答えたのはエリカのパートナーらしき外人の男性だ。
「エリカが行きたいって言ったから…。」
「はあ！？エリカがなんっつったからって非常識だろ！これは！！」
クロネコが怒鳴っている。
私と追いかけっこをしていた男の子が不思議そうにこちらを見ている。
「お姉ちゃん、つかまっちゃったの？」
「んん～？」エリカが男の子を見る。
おいでおいで、と手招き。
トコトコと近寄ってきた男の子の頭を撫でるそぶりをして、つかむ。
夢がしゅるる、とガラス玉の中に凝縮された。
「ふふ。もーらい！」

「おい！エリカ！！」
「ふふーん。いいじゃない、これくらい。…それにね、今日はあなたに用があってきたのよ。ユーコちゃん。」
エリカが弾む声で告げる。
「突然だけど、今日はね。」お腹に回る腕がぐっと強くなる。
「あなたの夢を、もらいに来たの。」
体にかかる重圧。「おい！！」遠くでクロネコが叫んでいる。
「ねえ、」
間近でのぞく、エリカの瞳にぞっとした。
狂っている。
――私よりも。
「『ちょうだい』？」
赤い唇がニイッと笑う。
力が抜けた。

13.

それからずっと、考えていた。

これからどうすべきか。

私は負けてしまったのだろうか。エリカに。

これからどうすればいい？

靄のかかった空虚な部屋でただそれだけを考えていた。

私はこのまま夢を集め続けるべきなのだろうか。それとももうやめるべきなのだろうか。

私の夢はそこまでしてかなえるべきものなのだろうか。私に夢を奪われた人々、その総数よりも、ずっと私の夢はかなえるべきものなのだろうか。里ちゃんのあの美しい夢よりも？

それにだって少年だって、あんなに青い顔をして謝っていたのだし、おばさん達が追い返していたけれど葬式にも真新しい喪服を着て現れた。あの少年にだって夢はあるのではないか。私の夢をかなえるとすれば彼の夢までも永久に奪うことになるのではないか。彼の可能性をすべて奪ってしまうのではないか。彼には彼の未来が、これから先の輝かしい未来が、待っているはずなのに、それを私が勝手に奪ってしまっていいのだろうか。

いやいやでも父だって。私の父も私には絶対に必要な人だったし、ずっと面倒を見てくれていたし。高校生のころはむかつくことも多かったけれど、今ならちゃんと愛されていたのだと思えるくらいには世話をしてもらっていた。私は父が好きだった。なぜ彼が永遠に奪われてしまったのだろう。あの少年がいなければ。あの少年がいなければ、父は今も私の隣の部屋で眠っていたのだ。私の隣の部屋で寝て起きて、私に朝食の催促をし、ごみの袋を持って出勤していたのだ。なぜ彼は今いなくなってしまった？

一方に傾けばもう一方が盛り返し、そちらに傾けばまた片方の論が

口調を強める。
堂々巡りのまま、私はまどろんでいた。

14.

「おはよー。となり空いてる？」
「ああ、うん。おはよー」
千尋の席の隣が開いていたので座らせてもらう。
「なんか久しぶりじゃない？」
「んー、そうかも。最近ひきこもってたから…。」
「おいおいー」
ははは、と笑いあう。
「でも今日からは頑張って授業でるからね！ってことでノート見せてーー！」千尋を拝む。周りにも無断で欠席のため、代返も頼んでいなかった。一応ノートはそろえておきたい。
「まあ、授業終わったらねー。って最近里子も見ないんだよねー。何か知ってる？」
「へ！？里ちゃんも？いやいや全然知らないー！」
「そっかー。なんか会っても元気なさそうだったりで…。何かあったのかなー。」
最近、最近…。里ちゃんにかかわることで何かあった気がするんだけど…。何だったかな…。
「へえー。私最近会ってないからわかんないなー。どうしたんだろ。」
「んー…。ああ、それよりさあ…」
そのあとは最近はやりの映画の話をした。好きな俳優さんが出ているらしい。絶対見るよーー。と約束をした。

昨日の朝、目が覚めると胸にぽっかりと穴が開いた気がしていた。何か空虚な感じ。今まで大切にしていたものがすっぽり根こそぎ取り去られた感じ。でも不思議とその分胸が軽くなってさわやかな気

分。カーテンを開けて、窓を開け、朝の空気を吸い込んだ。より一層さわやかにはなったけれど、何だこれ…。
脱いだ服がそのまま放り投げてあるし、頭はべとべと。それになんだか埃っぽい。
一瞬我にかえって、何か大切なことを思い出した気がしたけれど、すぐに霧散してどこかへ行ってしまった。
部屋を出てもまたひどい。ごみがあふれている。特にカップラーメン。確かに最近寝てばかりで散らかした記憶はあるけれど…。全く。なんであんなにぐーすか寝てられたんだろ。頭が痛くなりそうなものだけど。――そこでまた何か違和感がした。何かを忘れている気がする。何か大切なことを忘れている気がする。
…いや、関係ないか。
結局その日は掃除で1日が終わってしまった。あーあ。

それにしても里ちゃん休んでるんだ…。心配だなー。

15.

私はずうっと考えている。
私はあの少年をどうするべきなのだろうか。どうしたいのだろうか。父は私にどうすることを望んでいるのだろうか。考えても詮のないことばかりぐだぐだと考えていた。わかっていても問い続ける。問い続けることしかできなかった。エリカにとらわれた私には。
私だって少しは考えている。あの少年を欲に任せて殺すこと、殺してもらうことは人道にもとる行いではないか。少年は事故を起こしたとして罰金刑は課されているのだし、その意味では十分裁かれているその上に私が彼らに頼んで彼の命までも奪うことは法に反する行いともとれるのではないだろうか。頭では分かっている。私の理性は何度もそう叫んできた。けれど父を失ったことによる日々の違和感や喪失感は理性などでは補えない。そもそも理屈が出張って自分を納得させようとしている時点でもう駄目なのだ。私は父が死ん

だことに対して心の底では納得していない。私はあの少年が憎らしい。そしてその思いがクロネコたちを引き寄せたんだろう。全国で毎年何万人の交通事故での死亡者がいると聞いても、まさか私に関係する日が来るとは思ってみなかった。いくら何万分の一もの事例でありふれているからと言って、刑務所にも入らず罰金で済むほどの軽い刑だなんて思っていなかった。人が一人死んでいるというのに。状況からいっても、人は出会いがしらの不幸な事故だという。少年の過失は小さく、避けることの難しい事故であったと。私も正直それは思う。けれど、それと少年が父を殺したという事実とは別だ。親戚がいくらかいるとしても、私の直接の肉親は父一人であり、その父一人を私はどれだけ頼りにしていただろう。その父が少年によっていきなり奪われてしまったのだ。私はまだそれにとらわれている。私は父が死んだと聞いた日から一日たりとも経過していない。私が前へ進むにはこれにけりをつけなければいけないのだ。すなわち少年を殺す、と。けれども、ああ、私は怖いのだ。これほど大きな思いが少年を殺すというただ一つのことで果たして解消されるのだろうか。私は少年という対象がいるばかりに彼を殺せば父の無念が晴れるとそう勝手に信じ込んでいるだけではないのだろうか。もしかしたら他にも道はあるのかもしれないし、そちらのほうが正しい可能性は十分すぎるほどにある。

父さん、私はいったいどうすればいいんだろう。

ねえ、父さん

「ああ」

１６．

何かを忘れている。はっきりとそう感じる。何か大切なことを忘れている。それはわかるのにそれ以降のことが一向にわからない。考えて考えて、わからずにもう二週間近くがたっている。

忘れていることにおそらく関係のあること、つまり日常で違和感を感じる点は二つ。里ちゃんと睡眠だ。

いったい何の関連性があるのかは全く分からないが、この二つについて考えるときは何かの違和感を感じる。この二つに関しては何かがおかしい。里ちゃんは私が何かを忘れたころから元気がないし、この２週間寝ている間夢を見ない。偶然かもしれないし、夢に関しては起きた時に忘れているだけ、ということも十分に考えられる。

けれども何かがおかしい、と私は感じるのだ。

授業帰り、家についてドアを開ける。

「ただいまー」

返事はない。当然だ。だれもいるはずがないのだから。

それでもつい言ってしまうこれは癖だろうか。頭の奥から父の「おかえり」という声がした。

空虚な気持ちになってため息をつく。父はもう死んだのに。

部屋着に着替えてリビングへ行き、テレビをつける。

大したものはやっていない。

暇だ。

そのままだらだらとみていると６時になった。

ニュースが始まる。どこの球団が勝ったの、芸能人の熱愛発覚だの殺人事件がどうたらこうたらいっていた。

そろそろ夕食を作らなければいけないだろうか。

ぼうっとニュースを眺めながら冷蔵庫の中身を思い出す。

ああ、その前にご飯を炊かなくては。
テレビに飽きて姿勢を変えると母と並んだ父の写真が目に入った。
そこに黒い影が視界をよぎる。
ああ、まただ。
何かの予兆だろうか。それにしても黒とは縁起が悪い。
バチンとテレビを消した。
お米をといで、炊きあがるまでには一時間かかる。
テレビを見る気分にもならなかったので、マンガでも読もうと部屋へ向かう。
ドアに手をかけて、考えた。
この隣は、父の部屋だ。
静まり返った部屋のなか。父が死んで以後、片付けをするのに何度か入ったが、それでも普段は入ることはない。
私の中で、隣の部屋はまだ父の部屋だった。
なんとなく中に入ろうと思った。
ドアをノックする。…なにをしているんだ、私は。
返事を待たずに中に入る。返事なんてするはずがないし。
心なしか父の匂いがした。

イスに座ったり、本棚に置いてある本をぱらぱらとめくったりして暇をつぶした。
イスはよくオフィスにあるような、丸くてふかふかのクッションがついているイスで、くるくる回るのが楽しい。
背もたれをギイギイいわせながらイスの上にしゃがんだ。上を見上げる。
父が生きていたころと何も変わらない天井。電気のかさのところに埃がたまっている。

リビングからピーっと鳴る音がした。
炊飯器だ。

思ったよりもぼうっとしていたらしい。
いけない。まだおかずを何も作っていない。
もう。どうしようか。
適当に野菜を切っていためた。
夕食は結局８時近く。おいしくもまずくもない野菜をぱくつく。
半分だけ食べて、あとは明日の朝食にすることにした。
顔をあげると父の写真が目に入る。
またしても黒い影。
今日はなぜか父が気になる。
死人なんてもうどうしようもできないのに。
食器を片づけて、洗って、しまった。
線香を出してきて、火をつける。
父と母の写真に手を合わせた。
頭がまともに働かない。今日はどうも、むなしい気分だ。
きっとそれは今、父さんが死んでいるからだ。
少年の青ざめた顔がふっと脳裏に浮かんだ。それをかき消す。
息をつき、目を閉じて祈った。
ねえ、父さん。私、どうしたらいいんだろう。
父さん、父さん。
黒い影が猫の形であると気付く。

「ああ」

１７．
「起きたか。」
だいぶ近くから男の声がした。
茶髪に外ハネ、そばかす。クロネコだ。
私は固い地べたに寝ている。黒猫はそのそばで片ひざを立てて座っていた。私をのぞきこんでいる。
頭がぼうっとする。

「起きろ。」
もう起きてるって。
「立て。」
起きぬけに何よ。
クロネコが立ち上がって手を差し出す。
「もう…」
立ち上がる拍子に地面が見えた。
「！！何これ！」
ガラスのように透明で、奥に行くほど暗くほのかに青い地面の中に何人もの人間が沈んでいた。
「エリカの集めた夢だ。」
もう大分、ぎっしり詰まっている。
「さっきまでお前もこの中にいた。ほら、ここがあいてるだろう？上のほうにいるほど、力が強いんだぜ。よかったな。」
「…よくないわよ。」いや、だとか、怖い、だとか、気持ち悪い、だとか、いろいろ思っていたのだが、クロネコがあまりにあっさり言うものだからなんだか脱力してしまった。
「いや、よかった。あともう少し遅かったらエリカの夢がかなえられてしまうところだった。」
クロネコがほっとしたように言った。
改めて地面を見る。
「エリカの夢はここがぎっしり詰まったらかなうの？」
「ああ、そうだな。あともう少しだ。」
調度品も何もない空間。天井に暗い青が反射して、まるで洞窟の中のようだ。
海の上に立っている気がして、ぞっとした。
「逃げるぞ。」
クロネコが人間の姿のまま私の手を引く。
早足で歩くたび黒猫の革靴がコツコツと音をたてた。
場違いにも存在するごく普通のドアを開けるとその向かいにはさら

に同様のドアがあった。
クロネコはそれを無視して右へ曲がる。白を基調とした廊下にドアが乱立している。
今にもそこからエリカが出てきそうな気がして内心気が気ではなかった。
しばらく歩いていると不意に水から上がるような感触がした。夢から出たのだ。
後ろを振り返ると何もない空間がただ広がっていた。
クロネコはどんどん歩いていく。手をひかれて私もてくてくと歩いて行く。
こうして夢の中を歩くのは久しぶりだ。時々足もとが抜ける感覚がして怖い。
かっちりした黒いベストを着たクロネコの背中をじっと見つめる。
迷いのない足取りに、とりあえずこのままついていけばいいか、と思った。

5

１８.
私はそのあとも変わりなく夢を集め続けた。
老人、かわいい女の子、むさいおっさん。
それぞれがそれぞれに夢を持っていた。
けれど私も夢を持っていた。
そのために他人の夢を犠牲にすることになっても、私はもうかまわなかった。
運が悪かったね。そう言って、私は彼らを犠牲にする。
クロネコは何も言わない。人間の姿をしていたのはあの時っきりだ。
今はいつもの黒猫の姿をしている。

器はまもなく満たされた。

雨の降りしきる中、ガンっ！！ギュルギュルギュルギュル！！！という音がした。
私は暖房の効きすぎたコンビニでマンガを立ち読みしていた。
雨で路面が滑ったらしい。十字路を曲がろうとした間際の悲劇だそうだ。
滑ったバイクから体を投げ出された少年は、地面に叩きつけられてバウンドする。
ぐったりとする彼に友人らしい近くを走っていた男性が駆け寄る。
場はにわかに騒然となり、いくらかして救急車が走ってきた。
でもその少年は助からない。当たり前だ。私がそう願ったのだから。
私は大して面白くもないマンガを眺めながら、抑えきれない笑みを浮かべた。
ガラスと歩道をまたいだ道路では、今もざわざわという喧騒がおさまらずにいる。

ぱらりとページをめくった。

１９．

私は何度も夢を見る。

詳細は覚えていない。

ガンっ！っと何かがぶつかる音と、ギュルギュルギュル！！というエンジン音。

そのたびに人が飛ばされてぐったりと地面に横たわる。

飛ばされる人は覚えている限りでは二人。

スーツを着たオジサンが飛ばされた時は父が死んだときの空想だろう、と思うのだが、

不思議なのはヘルメットをかぶった男性が飛ばされる時だ。あれはいったい誰なのだろう。

地面に飛ばされて、きっと死んでいるだろうその人を、私は恐ろしくも愉快な気分で眺めている。

何をしているのだ。私は。

人が一人死んでいるというのに。

どちらのパターンだとしても、起きた時にひどく恐ろしい気分になる。

誰かが死ぬ夢だなんて、縁起が悪い。

夜中に起きて、そのまま寝る気にもなれずとりあえず近くのコンビニへ行く。

夜に出歩く癖がついたのも、そういえば最近だ。

ぼうっと夢を見ているようなむなしさと、足元で何かが一緒に歩いているような安心感。それがひどく好ましかった。

そして同時に、恐ろしかった。

出歩く夜はなんでもできる気分に陥る。がらにもなく高揚した気分で、少し遠くまで散歩する。

道路では思い出したように車が走っている。人間はあまり歩いていない。

夜道も外灯がぽつぽつと照らしているのであまり怖くない。
それでも何かがそばから飛び出してきそうな気がして、何かに手をひかれている気がして、意味もなく恐ろしかった。

私は髪を切った。とりあえず、私の何かを変えたかった。
今までの私と決別したかった。
夜中に出歩くのもやめようと思った。
きっとそのうち、全部忘れてしまうだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3724i/

地獄の中の人（仮）

2010年10月12日09時25分発行